



高橋教授の

この人に 会いたい

Vol.87

ゲスト

小路直

氏 東海大学医学部外科学系腎泌尿器科学領域教授

東海大学外科学系腎泌尿器科学領域の小路直教授は、前立腺がんの低侵襲治療分野で日本のみならず、世界を牽引するエキスパートだ。今年4月、教授に昇格したことに伴い、自らの研究を追求するだけでなく、教育面の充実や、働きやすい環境づくりなど組織全体のマネジメントの役割も担う立場になった。前立腺がん治療の最前線やこれからの展望、さらには、経営修士の学位を取得して新たに覚えてきたことなど幅広く語り合った。

画家志望から「スゴ腕ドクター」へ 先端技術でがん治療の地平を開く

泌尿器科医を勧めた「怪物」 転機となった米国への留学

高橋 小路先生とは2018年、私が担当する医療経営分野の修士コースに入学されたのが最初の出会いでした。大変ユニークかつ独創性の高い治療、臨床研究で注目を集めています。当時は准教授でしたが、日増しに存在感が大きくなり、その成長過程も目の当たりにしてきました。まず、簡単に経歴を教えてください。

小路 東京医科大学卒業後の02年、スーパードクターシヨンのため研修医として聖路加国際病院に入りました。そこで出会ったのが「怪物」と呼ばれた日野原重明先生(当時名誉院長)です。新しい技術が好きで、お年寄りと話するのが上手だった私の性格や様子を見ていた日野原先生から、「泌尿器科が良いのではないか」と勧められました。繰り返し言われるうちに、自分でも泌尿器科が良いと思うようになりまして……(笑)。
当時は腹腔鏡手術が広まり始め

たところで興味がありました。ちょうど、東海大学の教授陣の顔ぶれが新しくなったことを知り、「苦勞するかもしれないが、チャンスもあるはず」と思い、東海大学の大学院に進学し、臨床中心に過ごしました。
高橋 私の講義を受けていたころ、ある日突然、全国のスゴ腕ドクターを紹介するテレビ番組のクルーが小路先生の追っかけ取材に来て驚いたことがあります。「臨床もすごいらしい」とわかり、気になり始めたことを覚えていました。

小路 あつという間に30歳を超え、これからどうしようかと考えていたときに、留学の話がありました。11年から2年間、米国の南カリフォルニア大学に留学したのですが、担当のギル教授は猛烈に働く方で、触発された私も英語の論文を5、6本書き、大変有意義な時間を過ごしました。
留学中、MRIで前立腺のがん病巣を画像観察する方法があることを知りました。MRI超音波融合画像に基づいた前立腺生検法と、「Focal Therapy」

撮影=羽切利夫

というがん病巣だけを治療し、正常組織を残す治療です。これを日本に導入することを自分の使命と考え、臨床研究の準備に必死に取り組みました。生検法に関してしては22年、保険収載に持っていくことができました。

画像技術による高精度生検 前立腺がん治療の切り札に

高橋 従来の前立腺がんの診断、治療法との違いや、どのような利点があるかを詳しく教えてください。

小路 標準的な前立腺がんの治療は、前立腺の全摘出や前立腺全体に放射線を当てることです。しかし、がんが治っても尿漏れや性機能を失ってしまうことが大きな課題でした。前立腺がんは17年以降、

男性のがん罹患率のトップです。若年層で罹患することも多く、尿漏れがある状況では仕事にもさしかええ。MRI画像と超音波で得たデータを融合させ、がんの場所や大きさ、形を特定し組織検査を行うことで、効率的で見逃しの少ない生検ができます。さらに、強力な超音波で病巣を焼灼する低侵襲の治療法「HIFU(ハイフ)」は尿漏れがほとんどなく、性機能もかなり残しやすいというメリットがあります。

高橋 泌尿器科は「ダビンチ」に代表されるロボット支援手術が積極的に取り入れられています。血管が細くて多いという臓器特性が関係していると思いますが、ハイテク医療の顔とも言える診療科です。
小路 実は、古代エジプトではピラミッド建設に動員された労働者の報酬がビールだったそうです。ビールをたくさん飲むため尿路結石になりやすく、ミイラからもその痕跡がうかがえます。もちろん、当時は内視鏡はありませんでしたが、尿道から管を入れて石を取る医療機器らしいものがあったことは記





社会に対する発信力を高める — 小路

録にも残っています。

医局と病院のより良い関係 求められるのは教育の視点

高橋 なるほど、それは面白い話です。ところで、高校時代まではずっとプロの画家をめざしていたそうですね。

小路 私に絵画の指導をしてくださったのは日本画の巨匠、平山郁夫先生の弟子の木村孝男先生でした。画家としての将来性については自信がなく、画家は諦めました。平山先生は、破壊された海外の歴史的文化遺産の修復など社会貢献活動にも熱心でした。自分も「人のためになる仕事に就きたい」と

の会議に出ても知識がないとつまらないです。事務方にきちんと意見を伝え、指摘するべきことは指摘できるようになりました。

他職種と出会い視野が広がる 数字で病院全体を俯瞰

高橋 本学で経営を2年間勉強し、自分の考え方、視点が大きく変わったことはありますか。

い、どんなことを考えているかわかることができたのは大きいです。「数字だけ見ていろいろ言っている」と思っていた病院の事務方が経営のことを深く考えており、医師に対する困りごとなど本音の部分を聞いたのも収穫でした。病院全体を俯瞰して眺められるようになり、経営データの数字を見ただけで、各診療科の内情まで見えるようになってきたのも面白いところです。

磨かれた経営センスで新風を — 高橋



小路 直

Sunao Shoji
東海大学医学部外科学系
腎泌尿器科学領域教授
しょうじ・すなお●1977年、東京都出身。2002年、東京医科大学医学部卒業。04年、聖路加国際病院外科系研修医修了。08年、東海大学大学院医学研究科修了。同大助教、講師を経て11～13年、米国南カリフォルニア大学泌尿器科へ留学。14年、東海大学医学部腎泌尿器科学准教授、同大付属八王子病院医療連携室長を兼務。20年、国際医療福祉大学大学院医療経営管理分野修了。24年4月から現職。医学博士、経営修士

思い、医師だった父の姿を見て同じ道を志しました。

高橋 自分が取り組んでいる研究を診療報酬の保険収載までもっていきけるような行動力のある臨床家はそう多くいません。世の中の制度や仕組みを変えていくようなセンスはいつ芽生えたのですか。

小路 中学時代、歴史部だったのですが、今も自宅のトイレに歴史本が置いてあり、「トイレの時間が長い」と怒られています(笑)。戦国時代から明治維新、さらに田中角栄の権力闘争まで、幅広く継続的に読んできました。たとえば、物事がうまくいっても「五分の勝ちでよしとする」という武田信玄の教えなどを頭に描いて動いているようなところはあるかもしれま

光景が目に見えて浮かんでくるようにならないと始まりません。そういうセンスは以前から持っていたと思いますが、准教授の時代と教授になってからは、見方が変わりますか。

小路 明らかに違います。教授は研究業績を上げることだけでなく、全体のマネジメントも考える必要があります。皆に楽しく仕事をしていただかなければなりません。そのため、まずは自分が率先して働くことで、それは経営者にとって最も重要だと思えます。ですから、外来患者もこれまでより多く受け持つようにしていますし、オペ数もひと一倍多く入れ、精一杯働いています。

高橋 「臨床」「研究」「教育」のバランスを考えないといけない立場ですが、その比率はいかがですか。

高橋 泰

Tai Takahashi
国際医療福祉大学教授
たかはし・たい●1986年、金沢大学医学部卒業、東京大学病院第1第3第2内科・麻酔科で研修。92年、同大学医学部医学系大学院医学博士課程修了(医学博士)後、米国スタンフォード大学に留学。94年、ハーバード大学公衆衛生校に武見フェローとして留学。97年4月、国際医療福祉大学医療福祉学部医療経営管理学科教授。2016年9月より21年3月まで安倍内閣未来投資会議の構造改革徹底推進会医療福祉部門副会長を務めた

せんね。

高橋 病院経営者はおそらく、医局、特に教授とのつき合い方に大変興味を持っています。病院が医局とうまくつき合うコツを聞かせてください。

小路 大学と関連病院が手を携えて医療提供していく際に何が必要かを考えた場合、病院はやはり教育できる場でないという意味がありませんし、この点を意識することが大切だと考えます。ですから、医師の派遣を求められた場合、その病院がどんな医療を提供しているのか、わかっているもあえて聞くようにしています。

高橋 「医局が何を求めているのか」ということを病院側も考える必要があるということですね。

小路 やはり、派遣する先生方が高いモチベーションを持ってやれるような環境をつくっていただきたいという思いはあります。

高橋 そもそも、経営に興味を持った理由は何ですか。

小路 これからの自分の生きる道を考えるうえで、視野を広げたいと思いました。准教授時代、経営

小路 それらをいかにオーバーラップさせるかを考えています。たとえば、教育の延長上にある研究や臨床が教育と研究に重なっている部分もあります。うまくオーバーラップさせれば、効率アップにつながるはずですよ。

高橋 大学教授、あるいは泌尿器科の臨床医として、力を入れて取り組んでみたいことは何ですか。

小路 医療を高めていくことは当然ですが、社会に対しても発信していかなければならない立場だと思えます。「これはおかしい」という問題提起も含め、大所、高所から情報を発信し、語弊があるかもしれないませんが、文化人的な素養も養っていきたいと考えています。

高橋 小路先生は敵をつくらず、新しいことに挑戦し、周囲に認められながら昇任するという王道を歩んできました。その卓越した戦略眼は、歴史を学んできた影響が大きい気がします。これから医療界でさらに新風を巻き起こして、本日はどうもありがとうございます。